

はしがき

一橋大学創立 150 年史準備室長

大月 康弘

本学は、昨年 9 月に創立 141 周年を迎えた。商法講習所以来の卒業生は、今春で 8 万 9 千人ほどになるはずである。各界に羽ばたいた卒業生らは、近代日本の形成に寄与し、国際社会に勇躍してわが国の地位向上に貢献してきた。一橋大学の歴史は、近代日本における社会科学の歴史であるとともに、日本経済の発展に寄与した人的資本形成の歴史であったと言ってよい。

学生たちは、この大学で何を学び、何を感じたのか。2008 年度より開講される「一橋大学の歴史」では、大学制度を講ずるとともに、各界で活躍する卒業生各位から、それぞれの時代の大学風景、またその後のキャリアに与えた影響について講話をいただいていた。近年では 2014 年度と 2016 年度に開講したが、本号には、その成果の一部を中心に玉稿を収めることができた。

濱谷正晴名誉教授は「一橋大学の歴史」の常連講師である。社会学部長のご経験もあり、いつも滋味溢れる講話を下さっている。今号には、本学での「社会調査」講座の祖、石田忠先生(1916～2011)の学問と、その息吹に触れた学生たちの想いについて寄稿下さった。

朝海和夫氏、加藤幹雄氏からは、講義を踏まえた玉稿をお寄せいただいた。本学の歴史には、外交官の山脈が燦然と輝いている。本稿を機に、明治以来の一橋外交官の人脈についての研究が学内外で深まることを期待したい。朝海氏の御尊父・朝海浩一郎氏が駐米大使として全権代表を務めた「60 年安保条約」。そのとき、本学の学生たちは何を考え、行動したのか。当時学生として在籍された加藤氏は、当時の時代精神、またその後の日本の歩みを見据えて、今に生きる学生たちに問いかけて下さった。時代を見通す慧眼に改めて学びたい。このほか、野村由美氏、大場高志氏からも、興味深い貴重なレポートを頂戴した。いずれも本学の各時代を物語る貴重な一ページである。

各位のご助力により、本学の果たしてきた役割を改めて学ぶ機会が得られたことは喜びに堪えない。今後とも本室の活動を通じて、8 年余り後に迫った創立 150 周年での事業に備えたいと思う。本号の編集・刊行には、前号と同様、一橋大学附属図書館のスタッフに大変お世話になった。ここに記して改めて心からの謝意を表するものである。